

石濱文庫の拓本資料

概要とモンゴル時代石刻拓本一覧

堤 一昭

【はじめに】

大阪外国語大学附属図書館に石濱純太郎博士の旧蔵書「石濱文庫」があることはよく知られている。4万冊あまりの膨大な量と質の東洋学の蒐書として紹介されるのが常である。だが石濱文庫には図書以外にも、ここで取り上げる拓本や、その他写真・研究過程を示すノート、書簡などの研究資料も多数含まれる。こちらは、図書ほどは知られていないようである。石濱文庫の拓本は、大部分がもとの器物に紙を直接当てて採った「原拓」であると思われる。貴重な研究資料として、あらためて概要とその中のモンゴル時代石刻拓本一覧を示したい⁽¹⁾。

【石濱文庫目録中の拓本記載箇所】

石濱文庫は譲り受けられてから十年の歳月をかけて整理され、『大阪外国語大学所蔵石濱文庫目録』が編纂・刊行された。1977年（昭和52年）3月発行のもの（青色の紙装丁。以下「目録A」）と、1979年（昭和54年）3月発行のもの（布貼り装丁で箱入り。以下「目録B」）の二種である。大学の図書館等に備えられているのは後者の「目録B」である。この二種の目録中、拓本資料は以下の箇所に記載されている。

- 「目録A」：①「漢籍の部」（62頁）C子部 第九藝術類 一書画之属 拓本 [17点（18点載るが、1点は次の篆刻之属に属するもの）]；②「写真の部」図版 pp. 435-471、p. 478 [下段に画像石の拓影]、p. 491 [下段に契丹文字資料]
- 「目録B」：①「漢籍の部」（76～77頁）C子部 第九藝術類 一書画之属 拓本 [24点]；②「写真の部」図版 pp. 434-455；③「写真の部」目録 pp. 492-500 [写真図版（p. 492）・写真・影印本も含めたリスト。全161タイトル。うち原拓と思しきもの126タイトル。1タイトルに相当点数の拓本を含むものあり。]

「目録B」は「目録A」の増補改訂版と考えられるが、拓本資料の記載についていうと関係は単純ではない。①「漢籍の部」の記載は「目録B」が「目録A」のものを全て含むので、「目録B」のみを参照すればよい。だが、②「写真の部」図版は両目録の体裁は異なり、所載点数は「目録A」のほうがかなり多く、両目録とも参照する必要がある。③「写真の部」目録は「目録B」のみである。

⁽¹⁾ 平成16年から大阪外大附属図書館に貴重図書問題専門委員会が設けられ、所蔵の貴重な図書・資料の再調査にむけた作業が開始された。筆者が委員として貴重図書室や書庫を一覧するなかで、調査の必要を最も感じたのが石濱文庫の拓本資料であった。ささやかながら本稿はその作業の一端である。

【文庫目録の記載をもととした拓本資料の概要】

A・B両目録中の上記箇所に基づいて、まずは石濱文庫中の拓本資料の概要を示したい。その概要はA・B両目録はじめ未だ記されておらず、より詳しい調査のために必要と思われるためである。資料の種別や時代等により分類を試みる。

1. 漢代から唐代の名碑
2. 法帖
3. 龍門石窟の造像記
4. 北朝隋唐の墓誌銘
5. 非漢語刻文のものを含む石刻群
 - (1) 契丹文字石刻（慶陵出土哀冊）
 - (2) 女真文字石刻（大金得勝陀碑ほか）
 - (3) モンゴル時代石刻（蒙漢合璧碑・居庸関石刻ほか）
6. 石経
7. 漢代画像石
8. 金文・銅鼓など青銅器
9. 日本金石文
10. その他

1.漢代から唐代の名碑と 2.法帖は、目録の「漢籍の部」に記載される。前者には漢碑「孔廟置百石卒史碑」や唐碑「孔子廟堂之碑」等が、後者には「快雪堂法書」等が載る。主に書道研究のための剪装本の体裁のものである。

3以下は、目録の「写真の部」に記載される一枚物の「整拓」で多種多様である。

3.龍門石窟の造像記は、この拓本資料中最多と思われる。「目録B」「写真の部」記載の点数を単純に加算すれば800点以上となる。4.北朝隋唐の墓誌銘も30数点以上ある。5.非漢語刻文のものを含む石刻群は点数こそ少ないが、チベット、契丹、女真、モンゴル、西夏など石濱博士の研究分野を反映したものである。6.石経は、易経・毛詩・周禮・儀禮・禮記・春秋経傳集解（左氏傳?）・春秋公羊経傳・御注孝経・論語・爾雅と十種の経書が載る。どの石経か特定する作業が必要である。7.漢代画像石、8.金文・銅鼓など青銅器、また9.古代から明治に至る数点の日本金石文は、現時点では存在を指摘するのみに止めたい。10.その他として、上記に分類しがたいものも幾つかある。

上記分類のうち、1、2は複製本も含まれるようだが、「写真の部」に記載される3以下の拓本はほとんどが「原拓」と思われる。「原拓」自体が採拓時点での原石の状況を示す記念物であり、また「原拓」を新たにここまで収集することは難しいことから、石濱文庫の拓本は価値あるものと言えよう。

【調査の目的】

拓本整理はきわめて手間のかかる作業であり、文庫目録中の成果から出発できることに感謝すべきである。ただ恐らくは時間が切迫した中での作業のためであろう、図版説明の位置や順序をはじめ記載項目の体裁、配列、校正等について、修正の余地が多々あることも確かである。目録があるにもかかわらず、調査を始めるのはそのため

である。

これからの調査の目的は、石濱文庫の拓本にはどんな種類のものがどのくらいあり、各々が何なのかを、石刻書等が参照しやすくなった現在のより恵まれた状況のなかで、明らかにしていくことである。具体的には拓本の題名、著者、立石年代など書誌事項を特定していくこと、現状、原拓かそれとも模拓・写真・影印本かどうかの確認、目録A・Bの記載との対照、関連する主要な石刻書や研究文献の提示である。それにより各拓本の性格・価値を示し、今後の調査研究の便に供していきたい。

【石濱文庫のモンゴル時代石刻拓本の特徴】

本稿で一覧を示すのは、筆者の専門であるモンゴル時代史に関わる以下の石刻拓本九点で、いずれも原拓である。上述の分類では5.非漢語刻文のものを含む石刻群の(3)モンゴル時代石刻となる。一【加封孔子制詔碑 碑陰】、二【全寧路新建儒学記】、三【張公先徳碑】、四【張氏先塋碑】、五【達魯花赤竹君碑】六【居庸関石刻佛経】、七【莫高窟造像記】、八【勅賜大司徒寿公碑 篆額】、九【房山十字寺石刻】。

特徴は一つの石刻に漢字だけでなくモンゴル文字ほか刻まれるもの、またはそれに関連するものが主であることで、点数こそ少ないが、石濱博士は多言語・多種文字の石刻歴史的・研究史的に重要なものを特に選んで所蔵されていたと思われる。

漢文モンゴル文合璧のものが二点（四【張氏先塋碑】、五【達魯花赤竹君碑】）、その二点と同時に近傍で得られた、歴史的にも密接に関わる漢文のみのもものが二点（二【全寧路新建儒学記】、三【張公先徳碑】）。六種の文字で刻まれたものが二点（六【居庸関石刻佛経】、七【莫高窟造像記】）。前者は佛教の陀羅尼經典類の文章がランチャ・チベット・パスパ・ウイグル・西夏・漢の六種で、後者も真言「オン・マニ・ペメ・フン（ああ蓮華の上の宝珠）」がサンスクリット・チベット・漢・西夏・パスパ・ウイグルの六種で刻まれている。また、九【房山十字寺石刻】には十字架の周辺にシリア文字が刻まれたものを含む。残る漢文のみの一【加封孔子制詔碑 碑陰】も碑陽（拓本は非所蔵）の上部がパスパ文字漢文・下部が刻まれるものであった。

歴史的・研究史上も重要なものを含む。一【加封孔子制詔碑 碑陰】は、モンゴル時代の中国において儒教保護・育成の政策が行われていた証左となる史料の一つ。二【全寧路新建儒学記】、三【張公先徳碑】、四【張氏先塋碑】、五【達魯花赤竹君碑】は、チンギス・カン家の姻族コンギラト部族の本拠地・全寧路（現 内モンゴル自治区赤峰市）に立てられたもので、現地の有力者に関わる情報を含み、特に四・五はF. W. Cleavesによる漢文面モンゴル文面双方の詳細な研究で知られる。六【居庸関石刻佛経】はで長尾雅人、藤枝晃、足利惇氏、西田龍雄、江実、梶山雄一諸氏による研究で著名である（村田治郎編著『居庸関』第二編門洞内刻文）。七【莫高窟造像記】は、西寧王スレイマン一族による敦煌莫高窟改修を記念したもの、チャガタイ王家の一分枝の活動やモンゴル治下の敦煌を知る重要な史料である。八【勅賜大司徒寿公碑 篆額】は、石刻書等への著録が知られていない珍しいもの、また九【房山十字寺石刻】は、モンゴル時代中国でのネストリウス派キリスト教徒の活動の証左である。

【モンゴル時代石刻拓本一覧の凡例】

年代順に配列した（八は年代未詳、九は無年月）。各々(1) 碑題（書体）なお“/”は改

行をあらわす。；(2) 額題（書体）；(3) 撰文者（生没西暦年）；(4) 書丹者・額題者；(5) 立石年月日（西暦年）；(6) 拓本枚数；(7) 「石濱文庫目録」での著録箇所〔旧整理番号〕；(8) おもな著録・既存研究；(9) 備考、を記した。

一 【加封孔子制詔碑 碑陰】

- (1) : なし（正書）
- (2) : なし
- (3) :
- (4) : 張世凱
- (5) : 皇慶元年十月（1312）
- (6) : 碑陰のみ1枚。
- (7) : 「目録A」 p. 460 下左（碑陰拓影）；「目録B」 p. 493 左2 [No. 28332]
- (8) : 『（乾隆）原武縣志』卷六・職官・元縣尹・劉拜都。『同』卷八・藝文上「元成宗ハシ加封孔子制」（碑陽録文あり）；清・吳式芬『金石彙目分編』卷九之二 60a（著録）；羅常培・蔡美彪合編『八思巴字与元代漢語[資料彙編]』（北京・科学出版社、1959年）p. 34、[図版九]（碑陽の拓影。上截はパスパ文字漢文、下截は漢字漢文）；杉山正明「モンゴル命令文研究導論」『モンゴル帝国と大元ウルス』（京都・京都大学学術出版会、2004年）pp. 395-396（研究）、口絵 27（本拓本の写真）
- (9) : 曲阜をはじめ各地の孔子廟に立碑された武宗カイシャンによる大徳十一年（1307）の制詔碑のひとつで河南省原武縣にあったもの。『（乾隆）原武縣志』によれば泥中数尺に埋もれていたという。立石の現地関係者の一覧が載る碑陰の拓本であることの史料的意義は、杉山の研究参照。

二 【全寧路新建儒学記】

- (1) : 全寧路新建儒学記（正書）
- (2) : 全寧路新／建儒学記（篆書）
- (3) : 不明
- (4) : 不明
- (5) : 泰定二年六月（1325）
- (6) : 2枚（碑身1枚、篆額1枚）
- (7) : 「目録A」 p. 458 下（左：篆額、右：碑身の拓影）；「目録B」 p. 495 右9・10 番目 [No. 28336]
- (8) : 田村実造「烏丹城附近に元碑を探る」『蒙古学』第一冊、1937年、pp. 77-79（碑影（挿図3）、移録）；羅福頤『滿洲金石志』（1937年）卷四、15b-18b
- (9) : 1930年（昭和5年）羽田亨京都帝国大学教授を団長とする満州史蹟調査団「羽田ミッション」により拓本が得られたものの一つか。田村によると当時烏丹城内の関帝廟前庭に立っていたが、その後土中に埋もれていたらしい。2005年10月に内モン自治区赤峰市翁牛特旗の烏丹鎮の実験小学校近くで、この「全寧路新建儒学記」が再発見されたと中国各地のメディアで報じられた（新華社呼和浩特10月13日電。船田善之氏の示教による。）。

三【張公先徳碑】

- (1) : 大元同知徽政院事張公先徳之碑（正書）
- (2) : 大元同知徽政院／事住童先徳之碑（篆書）
- (3) : 馬祖常（1279-1338）
- (4) : 巉巖書、尚師簡篆額
- (5) : 至順四年（1333）
- (6) : 2枚（碑身（碑陽）1枚、篆額1枚。ただし碑身拓本は破れて2枚となっているため、現状は3枚。）
- (7) : 「目録A」p. 458 上（碑身上部の拓影）、p. 459 下左（篆額拓影）；「目録B」p. 493 左3番目 [No. 28337]
- (8) : 桑原隲藏『考史遊記』「東蒙古紀行」（岩波書店、岩波文庫、2001年）p. 341「張公先徳碑」（紹介）、図版 226（碑周辺の石人石獣の写真）；田村実造「烏丹城附近に元碑を探る」『蒙古学』第一冊、1937年、p. 70（碑影（挿図2））、pp. 74-77（移録）；羅福頤『滿洲金石志』（1937年）卷四、22a-25a（移録）
- (9) : 二と同じく1930年の調査によるものか。田村によると、当時は三【張氏先瑩碑】の後方に倒れており、初の採拓であるとする。

四【張氏先瑩碑】

- (1) : 皇元勅賜故贈榮祿大夫遼陽等處行中書省平章政事柱國追封薊國公張氏先瑩之碑（正書）
- (2) : 大元勅賜故榮祿大／夫遼陽等處行中書／省平章政事柱國追封薊國公張氏先瑩碑（篆書）
- (3) : 尚師簡、張起巖（1285-1353）。
- (4) : 巉巖書、許師敬篆額。
- (5) : 元統三年孟春（1335）
- (6) : 4枚（漢文篆額1枚、漢文碑身1枚。パスパ文字モンゴル文額1枚、ウイグル文字モンゴル文碑身1枚）
- (7) : 「目録A」p. 460 上左（漢文碑身上部の拓影）、上右（モンゴル文碑身の右上部の拓影）；「目録B」p. 441（モンゴル文碑身中央部の拓影）、p. 493 左4番目？ [No. 28339?]
- (8) : 桑原隲藏『考史遊記』「東蒙古紀行」（岩波書店、岩波文庫、2001年）p. 341「張氏先瑩碑」（紹介）、図版 224, 225（碑影）；外山軍治「熱河、北滿の史蹟調査略記」『東洋史研究』第一卷第一号、1935年、p. 100（紹介）、口絵図版・解説「烏丹城附近の二代元碑」（碑影）；田村実造「烏丹城附近に元碑を探る」『蒙古学』第一冊、1937年、p. 70（碑影（挿図1））、pp. 71-74（移録）、口絵（モンゴル文面の拓影）；羅福頤『滿洲金石志』（1937年）卷四、25b-32b（移録）；Francis W. Cleaves, The Sino-mongolian Inscription of 1338 in memory of Chang Ying-ju, Harvard Journal of Asiatic Studies 13-1/2, 1950, pp. 1-131, plates I-XXXV. (訳注)
- (9) : 二・三と同じく1930年の調査・採拓によるものか。

五【達魯花赤竹君碑】

- (1) : 大元勅賜故中順大夫諸色人匠都総管府達魯花赤竹君之碑（正書）
- (2) : 大元勅賜故／諸色人匠府／達魯花赤竹／公神道碑銘（篆書）
- (3) : 揭傒斯（1274-1344）
- (4) : 巉巖書、尚師簡篆額。
- (5) : 後至元四年五月（1338）
- (6) : 4枚（漢文面篆額1枚、漢文面碑身1枚、ウイグル文字モンゴル文額1枚、ウイグル文字モンゴル文碑身1枚）
- (7) : 「目録A」p. 459 上右（漢文面碑身上部の拓影）、下右（篆額拓影）；「目録B」p. 439 下（篆額拓影）、p. 495 右9・10 [No. 28338]
- (8) : 錢大昕『潛研堂金石跋尾』卷二十、6a-7a「中順大夫竹温台碑」（考証）；吳式芬『攷古録』卷十九、34a（著録）；桑原隲藏『考史遊記』「東蒙古紀行」（岩波書店、岩波文庫、2001年）p. 342「烏丹城」（紹介）；外山軍治「熱河、北滿の史蹟調査略記」『東洋史研究』第一卷第一号、1935年、p. 100（紹介）、口絵図版・解説「烏丹城附近の二代元碑」（碑影）；田村実造「烏丹城附近に元碑を探る」『蒙古学』第一冊、1937年、pp. 79-82（碑影（挿図4）、移録）、口絵（モンゴル文面の拓影）；羅福頤『滿洲金石志』（1937年）卷四、32b-38b（移録）；Francis W. Cleaves, The Sino-mongolian Inscription of 1338 in memory of Jigünteï, Harvard Journal of Asiatic Studies 14-1/2, 1951, pp. 1-104, plates I-XXXII.（訳注）
- (9) : 二・三と同じく1930年の調査・採拓によるものか。

六【居庸関石刻佛經】

- (1) : [東壁：佛頂尊勝陀羅尼、西壁：如来心陀羅尼]
- (2) : なし
- (3) :
- (4) :
- (5) : 至正五年（1345）
- (6) : 3枚（東壁の六体尊勝陀羅尼）（2006年1月現在確認分）
- (7) : 「石濱文庫目録」での著録箇所：「目録A」pp. 467-468（拓影）；「目録B」pp. 446-449（拓影）、p. 495 右6番目 [No. 28347, 28475]
- (8) : 吳式芬『攷古録』卷二十、14b（著録）；同『金石彙目分編』卷一、15a（著録）；村田治郎、藤枝晃編著『居庸関』I・II、京都大学工学部、1955-57、第二編門洞内刻文
- (9) : 当拓本は上記の村田・藤枝らの『居庸関』研究にも供された。著録・既存研究を記した『居庸関』pp. 130-132「5. 従来の研究と所拠の拓本」（藤枝晃）参照。

七【莫高窟造像記】

- (1) : なし（正書）
- (2) : なし
- (3) :
- (4) :

- (5) : 至正八年五月十五日 (1348)
- (6) : 1 枚
- (7) : 「石濱文庫目録」での著録箇所:「目録A」p. 471 上 (拓影);「目録B」p. 453 (拓影), p. 499 左 5 番目
- (8) : 吳式芬『攷古録』卷二十、20a-b(著録);E. Chavannes, *Dix inscriptions chinoises de l'Asie centrale d'après les estampages de M, Ch, -E. Bonin*, Paris, 1902, pp. 96-99. (研究、拓影); 羅振玉『西陲石刻録』36a-37b「莫高窟造象記」(移録)。張維『隴右金石録』元 69a-70b「莫高窟造相記」(著録と考証); 羽田亨「回鶻訳本安慧の俱舍論実義疏」『羽田博士史学論文集』下卷、言語・宗教編、京都・同朋舎、1957 年。pp.178-179 (言及); 謝稚柳『敦煌芸術叙録』上海、1955 年、図版一 (拓影); 松村潤「明代哈密王家の起源」『東洋学報』39-4、1957 年 (言及); 小田壽典「明初の哈密王家について—成祖のコムル経営」『東洋史研究』22-1、1963 年 (言及); 梅村坦「住民の種族構成—敦煌をめぐる諸民族の動向」講座・敦煌、第三卷『敦煌の社会』5, 1980 年 (拓影、研究); 『平成 2 年春季企画展 中国石刻拓本展出品図録』京都大学文学部博物館、1990 年 (拓影 p. 12 と解説 p. 36)。杉山正明「幽王チュベイとその系譜」『モンゴル帝国と大元ウルス』京都大学学術出版会、2004 年。pp. 270-274, 286-287 (研究)
- (9) : 2006 年 1 月現在調査中。

八【勅賜大司徒寿公碑】

- (1) : 不明
- (2) : 皇元勅賜大司徒筠□□/寿公之碑 (篆書)
- (3) : 不明
- (4) : 不明
- (5) : 不明
- (6) : 1 枚
- (7) : 未著録
- (8) : 未詳
- (9) : 篆額のみ。大司徒で勅建碑を立てられるほどの人物ながら、寿公については未詳。

九【房山十字寺石刻】

- (1) : なし
- (2) : なし
- (3) : なし
- (4) : なし
- (5) :
- (6) : 6 枚 (十字架面 2 枚、その各側面の植物文様計 4 枚)
- (7) : 未著録
- (8) : 佐伯好郎『景教の研究』(1935年、復刻版・名著普及会、1978年) 下篇第四章第六節「河北省房山県三盆山旧十字寺境内に於いて発見せられたるシリア文と十字架の彫刻せられたる大理石」pp. 930-956 (研究、拓影 (図版十二、十三)、実測図); 江

上波夫『モンゴル帝国とキリスト教』（東京、サンパウロ、2000年）第二章 三「ネストリウス派墓石の様式とその系統観」pp. 60-65（研究。拓影は佐伯前掲書による）；徐蘋芳（徐萃芳）「北京房山也里可温石刻」、南京博物館蔵宝録編輯委員会編『南京博物館蔵宝録』（中国珍宝鑑賞叢書）、三聯書店（香港）有限公司・上海文芸出版社聯合出版、1992年、pp. 263-264（紹介、十字架面2面の写真。松田孝一氏所蔵本より参照）；「十字寺」、北京市文物事業管理局編『北京名勝古迹辞典』、北京燕山出版社、1989年、p. 454

- (9)：現在、原石は南京博物院所蔵。佐伯前掲書に詳しい考証がある。その図版十二、十三に載る拓影6枚と同じ面の拓本。佐伯は5～7世紀、江上はそれを批判して10世紀のものと考証する。徐蘋芳が細部の特徴が泉州・内蒙古・新疆出土のネストリウス派の十字石刻と類似し、植物文が宋・金時代流行の題材であることから、13世紀末葉のものとするのに仮に従う。京都人文科学研究所にも、この石刻のうちシリア文字を四隅に刻む十字架の面と鉢植えの牡丹の面との2枚の拓本が蔵される（京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料・文字拓本、管理番号GEN0270AとB、表題「房山十字景教石刻」）。

(つつみ かずあき 大阪外国語大学)